

I 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	湯前町立湯前中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	0	6	15
生徒数	48	57	50	0	155	

研究の概要

1 研究主題

生きる力を育む教育活動の創造

2 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

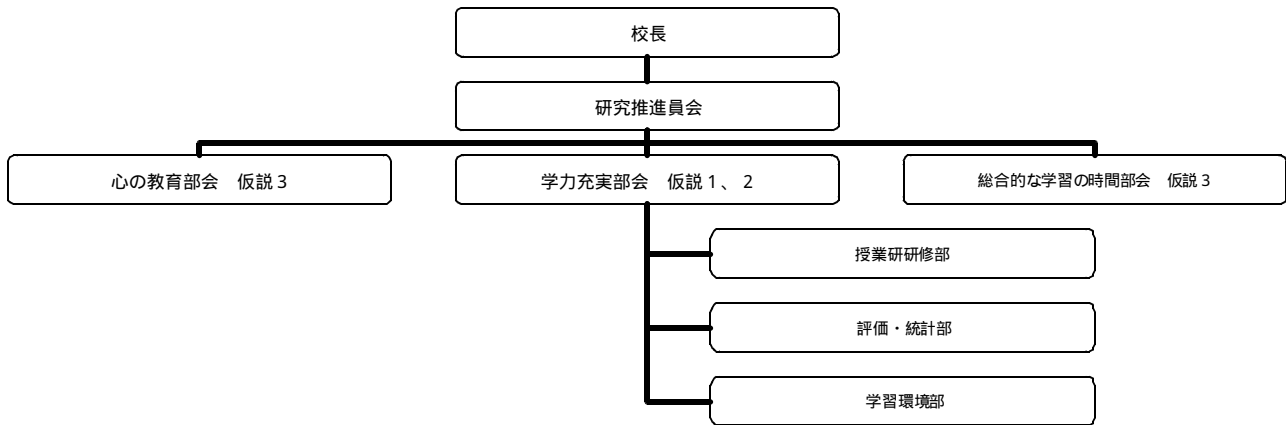
全学年 全教科

各学年の実態調査の結果をふまえ、職員の指導力向上のためにも全教科で取り組むことが適切と考えたため

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 一人ひとりに基礎学力を保证する学習システムの創造</p> <p>研究の見通し</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 各教科の基礎基本を定着させるための学習システムを開発し実践していけば生徒の基礎学力が向上していくであろう。 仮説1 ● 個に応じた学力の向上を保证する授業を開発し、実践していけば生徒の自ら学ぶ力や意欲が育ち基礎学力が向上するだろう。 仮説2 ● 「生きる力」を身につけさせる視点ですべての教育活動において心の教育を展開していくことで生徒の基礎学力を支える力と生きる力を育成できるであろう。 仮説3 <p>研究の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学力の分析を通して各教科における授業改善の視点を設定する。 ● 基礎基本のための学習システムを開発する。 ● 学ぶ力を身に付けさせる教科指導・学習指導を展開する。 ● 指導と評価の一体化を図り、基礎学力の習得に努める ● 心の教育の推進 ● 生徒理解生徒指導のための校内研究の推進
平成16年度	<p>テーマ 一人ひとりの基礎学力を保证し学ぶ力を向上させる指導法の工夫</p> <p>研究の見通し</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 評価を指導に活かす指導を実践すれば生徒の基礎学力と自ら学ぶ力が向上していくであろう。 仮説1 ● 個に応じた授業づくりと指導体制を工夫することで生徒の自ら学ぶ力や意欲が育ち基礎学力が向上するだろう。 仮説2 ● 「生きる力」を身につけさせる視点ですべての教育活動において心の教育を展開していくことで生徒の基礎学力を支える力と生きる力を育成できるであろう。 仮説3 <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 基礎基本習得のための学習システムを生徒に身に付けさせる。 ● 学ぶ力を身に付けさせる教科指導・学習指導を展開する。 ● 基礎基本習得のための学習システムを生徒に身に付けさせる。 ● 指導と評価の一体化を図り、基礎学力の習得に努める ● 少人数指導・TT指導の効果的な運用を図り、個に応じた指導を行う ● 心の教育の推進 ● 教科で培った基礎学力が総合的な学習の時間でどう深化統合されるかを明らかにする。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1 研究の成果

(1) 学力の分析と基礎的・基本的事項の習得

学力検査・県版基礎学力テスト(ゆうチャレンジ)・単元末テスト・毎時間の評価の蓄積などから学力を分析し、教科の授業改善の視点をそれぞれ、設定した。特に国語・数学・英語の三教科で指導の重点事項を共通理解した上で、朝自習と放課後の補充的な学習の場として設定した「パワーアップタイム」を活用し、基礎的・基本的事項の習得を目指し、全職員で指導にあっている。

(2) 個に応じた指導

数学

数学科では、授業のねらいにあわせて、等質の集団、習熟度別に指導を工夫。習熟度別指導を行うことで、毎時間のまとめプリントの達成率が向上した。

英語

TTによる指導できめ細かな指導と評価で課題である表現力に向上が見られた。また基礎基本となる単語練習を覚えるまで繰り返し取り組ませた。

パワーアップタイム(国・社・数・理・英)

放課後を活用し、20分間基礎学力向上のための時間を設定した。数学科では習熟度別による指導を行った。複数の指導者が入り、個別指導にも対応できる体制にした。これによって小学校の基礎学力が身に付いていない生徒に個別指導の時間を確保することが可能になった。これまで学習に対してなげやりな態度であった生徒が少しずつではあるが、前向きに自分の課題に取り組むようになった。

(3) 指導と評価の一体化

今日のまとめ52(図形と相似形)

今日のポイント

- 相似な記号を覚えていて、使うことができるか。
- 相似な記号の相似比を求めることができるか。
- 相似比を使って辺の長さを求めることができるか。

(1) 次の二つの三角形が相似であることを記号を使って表しなさい。

毎時間の基礎基本の習得と評価を一体化したワークシートを授業に取り入れ、生徒が評価を次の学びに活かすようにした。

左は数学科のまとめプリント。「今日のポイント」によって自分のつまづきを把握できるようにした。

このような取組によって生徒の「何が分からないのかが分からない。」「どうやって勉強すればいいのかが分からない。」という現状を変えることは出来た。またこのような評価の積み重ねと学期末の評定を分析することで現在の指導計画の練り直しの観点が設定された。特にC評価が多かった学習内容に関しては、指導方法・評価方法を見直し、実践した。

(4) 学力の変容

県版学力テストの昨年度との比較	
国語	関心意欲態度は大きく伸びている。前回のテストで作文に全く取り組もうとしなかった生徒が書くことに挑戦するようになっている。
社会	地理の「知識・理解」が、まだ、定着していない。歴史的分野は全体的に高い正答率ではあるが、「技能表現」のところで、資料を見てその説明文を考えたり、特色を説明するといった記述問題については全く書けていない生徒が3割ほどいる。
数学	数学に対する関心意欲態度が伸びが認められる。各分野で基礎的内容の定着にむけて徹底指導を行うことで意欲が高まったものとする。今後、数学的な考え方を伸ばす授業を創造する必要がある。
理科	全体的に観点別の達成率は平均しており、科学的思考や技能表現に関する定着が予想よりも高かった。しかし「興味関心」の達成率が低いことと個人差が大きいのが課題である。
英語	「書くこと」への抵抗が減り、自信がついたせいか、「関心意欲」が高まった。3年生ではリスニングを授業中に多く取り入れたため「聞くこと」の達成率が高かった。

2 今後の課題

各教科の基礎学力を定着させるシステムをさらに研究し、自ら学ぶ力のある生徒の育成を目指す。

関心意欲を高め、自ら学ぶ力をつけるために必修教科のみならず、選択教科・総合的な学習の時間に研究の領域を広げる。

授業で理解したことは、繰り返し学習しなければ定着しない。家庭学習の習慣化にむけて何らかの手だてを講じていきたい。

学力把握のための学校としての取組

学力検査：3月実施 各教科の観点別達成状況把握のため

国・社・数・理・英及び知能検査

県版学力テスト(ゆうチャレンジ)：12月実施 基礎学力定着の把握のため

国・社・数・理・英

学習に関するアンケート：4月・2月

授業や学習に関する生徒の意識調査をし、学ぶ力の育成に生かすため

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

研究発表会

平成16年11月上旬予定

研究成果の普及

校区内小学校との合同研修会

中間報告書の管内小中学校への配布

学力向上フロンティア事業球磨地区協議会での実践発表

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校	
【学校規模】	3学級以下	4～6学級	
	7～9学級	10～12学級	
	13～15学級	16学級以上	
【指導体制】	少人数指導	T・T指導	その他
【研究教科】	国語	社会	数学
	外国語	音楽	美術
	保健体育	その他	理科
			技術・家庭
【指導法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無